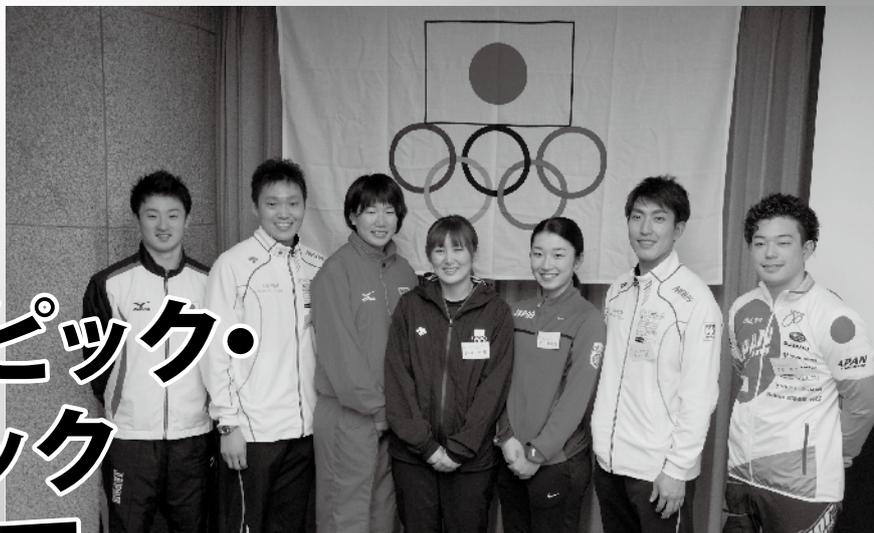


特集

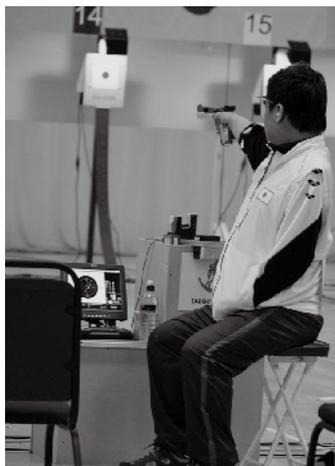
2020年 東京オリンピック・ パラリンピック 成功に向けて



KEIZAI DOYUKAI



2020年「東京オリンピック・パラリンピック」を成功させ、レガシーを次代に継承するために必要なことは何か。まずは、トップ・アスリートが最大限のパフォーマンスを発揮できるような練習環境を整えることが大切である。また、パラリンピックについては、国民への関心を喚起し、競技場へ足を運んでもらうことが必要となる。今回は、パラリンピック・ムーブメント推進についての座談会とトップ・アスリートへの就職支援ナビゲーション「アスナビ」での企業説明会を報告する。



INDEX

■座談会

パラリンピック・ムーブメント
推進に向けて P03

■第6回「One Company, One Athlete」

トップ・アスリートのための
支援・雇用に向けた企業説明会 P08

パラリンピック・ムーブメント推進に向けて



八田 茂氏

日本オリンピック委員会(JOC)
ナショナルトレーニングセンター
JOCキャリアアカデミー 事業ディレクター

森脇 敏夫氏

障がい者射撃・ピストル選手
アスナビにより、2015年から
ウスイホーム勤務

山脇 康(経済同友会幹事/東京オリンピック・
パラリンピック2020委員会委員)

日本パラリンピック委員会(JPC) 委員長
日本障がい者スポーツ協会(JPSA) 理事
日本郵船 アドバイザー

2020年、東京でパラリンピックが開催される。その意義とパラリンピックの魅力はどこにあるのか。また企業としてどのような支援ができるのか。日本オリンピック委員会(JOC)の八田茂氏が進行役となり、障がい者射撃・ピストル選手である森脇敏夫氏と、山脇康幹事・東京オリンピック・パラリンピック2020委員会委員(日本パラリンピック委員会《JPC》委員長・日本障がい者スポーツ協会《JPSA》理事)が、パラリンピック・ムーブメント推進に向けて語った。

テーマ

1 東京開催の意義とパラリンピックの魅力

ハードとソフトの障害を取り除き “共生社会”をつくる

八田：東京は、パラリンピックを同一都市で2回開催する初めての都市です。まずは東京開催の意義、そしてパラリンピックの魅力について語っていただきたいと思います。

山脇：2012年からボランティアを始めたのがきっかけで、パラリンピックとかかわるようになりました。私の在籍している日本郵船には、障がい者射撃のトップ選手である田口亜希選手が勤務しています。パラリンピック・ロンドン大会に応援に行き、競技を目の当たりにしました。

選手たちは、残された身体機能を最大限に使って何ができるのかを示していて、障がいに対する意識が大きく変わりました。パラリンピックとは人間の可能性を追求する究極の大会なので

す。そして、大会を通して誰もが助け合い、誰もが暮らしやすい“共生社会”をつくるのが、最終的な目的であると感じました。

2020年東京大会の意義も、ハード面で世界最先端の環境を整えるのと同時に、人々の障がいに対する意識を変え、“共生社会”をつくることにあるのだと思います。

八田：ロンドン大会を見て山脇さん自身の意識が変わったように、私も東京大会を多くの人に見てもらい、意識を変えてもらうことが大切だと思います。

森脇さんは、どのようなことがきっかけで射撃競技を始められたのですか。また、競技の魅力について教えてください。

森脇：私は約5年前から射撃競技を始めました。10代の時にバイク事故に遭い、左腕に障がいを負いました。その後モータースポーツに長く取り組んでいましたが、あるときBB弾(プラス

チックの遊戯銃用弾丸)のピストルで遊ぶ機会がありました。予想以上に楽しく、競技会にも参加し上位入賞するようになりました。そのようなときに、ある方から「免許を取って本格的に射撃に挑戦してみたら?」と言われて競技を始めました。ふとしたきっかけで始めた射撃ですが、すっかり魅力に取りつかれてしまいました。

これまでに何度かワールドカップに参加しましたが、海外のレベルの高さを実感しています。残念ながらリオデジャネイロ大会出場はかないませんが、東京大会出場を目指してトレーニングに励んでいます。今年3月には、基礎をもう一度学ぶため、ドイツ射撃学校の有志合宿に参加します。

射撃は選手の緊張感が伝わり 観戦して面白い競技

山脇：私も実際に射撃競技を見ましたが、選手のただならぬ緊張感が、競技場に張り詰めていました。選手たちの

■射撃競技紹介



2014年3月イギリス・ワールドカップでの森脇選手

射撃は、ライフルまたはピストルで規定の弾数を射撃し、その得点を競い合う競技。標的との距離は、種目によって50m、25m、10mに分かれている。1発の満点は10点となっており、射距離10mのエアライフル種目で10点満点を狙うには、直径0.5mmのマークに命中させなければならない。クラス分けは、射撃選手としての機能に基づいて行われる。パラリンピックでは、銃の種類や射撃姿勢によって、男女別3種目と混合6種目の計12種目がある。トップレベルでは満射の技術が求められ、一つのミスが勝敗を分けるため、集中力やメンタルの強さも不可欠。



集中力はすごい。エアライフルの場合は、10メートル先のわずか0.5ミリの10点を狙い45分で60発を発射する。ほんの数ミリの差が勝敗を分けるという驚異的な競技です。選手の緊張感はずさ

まじく、観客にも伝わって、自分も一緒に撃っているような感覚になりますね。**森脇**：競技では、40～60人の選手が一斉に打ち始め、それぞれの選手の得点がモニターに表示されます。リアルタ

イムで順位が次々に変わっていき、ゲーム性の高いものなので、見ていても面白いと思います。

山脇：それは、私も実感しました。射撃は観戦しても楽しめる競技です。

テーマ
2

アスリートの現状と課題

■■■■
原点は「アスリートファースト」
選手に最高の環境を与える

八田：私は、日本オリンピック委員会の要請を受けて、オリンピック選手のための就職支援に携わるようになりました。2010年からは経済同友会などの協力を得て、アスリートの就職支援ナビゲーション「アスナビ」をスタートさせました。これまで70社強に約100人のオリンピック選手の就職が決まり、パラリンピック選手も13人の就職が決まりました。

アスナビへは、マイナーな競技の選手もたくさん参加しています。彼らは、2020年の東京大会を千載一遇のチャンスととらえ、自分が大会に出場して活躍すれば、マイナー競技がメジャーに近づくという希望を持っているのです。

彼らを取り巻く環境は大変厳しく、例えば海外遠征費なども自己負担しているのが現状です。年間200万～300万

円程度の遠征費を自分で負担している選手が珍しくありません。選手だけではなく、コーチやトレーナーなどもボランティアのような形がかかっているのが現状です。彼らの環境、特に経済環境を整備しなければ、オリンピック・パラリンピックでハイパフォーマンスを期待するのは難しいでしょう。

山脇：パラリンピックの原点は、「アスリートファースト」です。何よりもアスリートに最高の環境を与えることが大切です。それがハイパフォーマンスを引き出し、観戦する人々の意識を変えるのです。私たちは常にこの原点を意識しなければいけません。

パラリンピックでも練習環境、日々の生活、遠征などすべてに関して、アスリート個人が負担して環境を整えてきました。しかし、世界でメダルを争うようなレベルは非常に高く、日々トレーニングをするフルタイム・アスリートが増えています。そうすると個人の努力だけでは限界があり、世界レベルに追

いつけない状況になっています。2年前まではパラリンピックは厚生労働省の所管で、福祉の延長として扱われていましたが、現在では文部科学省／スポーツ庁の所管となり、やっとスポーツとして扱われるようになりました。国の支援体制も以前に比べて少しずつ良くなったと思いますが、現状はまだまだ課題が山積しています。

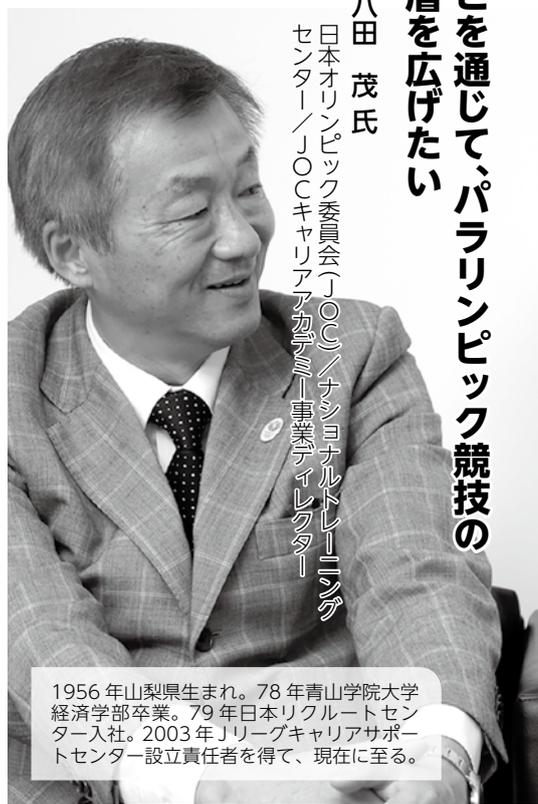
■■■■
競技団体を支援するパラリンピック
サポートセンターを設立

山脇：パラリンピックでは、選手だけではなく、各競技団体の組織が非常に脆弱です。ほとんどがボランティアで活動している状況です。そこで、去年の5月に日本財団がパラリンピックサポートセンター（パラサポ）を設立し、競技団体の基盤整備に乗り出しました。新たに開設したオフィスに25競技団体が入居し、東京大会後の2021年までに自立することを目指して、経理等の運営サポートを受けたり、ノウハウを共有する体制が整いました。

アスナビを通じて、パラリンピック競技のファン層を広げたい

八田 茂氏

日本オリンピック委員会（JOC）／ナショナルトレーニングセンター／JOCキャリアアカデミー／事業ディレクター



1956年山梨県生まれ。78年青山学院大学経済学部卒業。79年日本リクルートセンター入社。2003年Jリーグキャリアサポートセンター設立責任者を得て、現在に至る。

また、アスナビのスタートによって、フルタイムで競技をしたい選手も、仕事と両立したい選手も、企業に入社して競技を続けるチャンスが増えました。しかし、まだまだ足りません。世界のトップに行く国に比べれば、日本の環境は依然として良くない状況です。

八田：パラサポの設立で競技団体を取り巻く環境はかなり良くなりましたが、選手個人に対するサポートはまだまだと感じます。選手として、森脇さんはどんな課題を感じていますか。

森脇：射撃競技の世界では、若手が少ないのが悩みです。何しろ私が若手と言われるぐらいなので（笑）。免許の必要な銃を扱う競技だけに、健常者でも競技人口はそれほど多くはありません。まして障がい者となればなかなか新たな選手が出てきません。それでも私たちが活躍すれば、それが好影響となって選手が増えるのではないかと期待しています。

ただし、そのためには環境の整備が必要です。現状ではほとんどの選手が、アスリートとして活動するための資金を自ら稼がなければなりません。ところが選手の中には、障がいのために思うように就業できない人がたくさんいるのが現実です。お金が必要なのにお金が稼げない。そうした状況を何とか変えなければいけません。

山脇：そこで重要なのが民間企業によるサポートです。引退後の選手のセカンドライフも含めて、さらに多くの企業に選手を受け入れていただきたいと思います。同時にパラリンピックの各競技団体の運営を支えるスタッフも、企業の皆さんに出向などの形でご協力をお願いしたい。経済同友会の皆さんにはそうしたサポートを大いに期待しています。

森脇：私たちアスリート側にも問題があります。私はアスナビの支援を受けて現在の会社に入りましたが、アスリートの中にはアスナビの企業説明会で「多くの人の前で登壇して自分をプレゼンするなんて……」と尻込みする人もいます。アスリート自身も、もっと積極的に自らの環境を改善するメッセージを発信していくべきだと思います。

八田：最近各競技団体から、特にジュニアの選手などに対して、インタビューのトレーニングをしてほしいというニーズが高まっています。SNSの普及によって情報感度が高くなっているだけに、アスリートがプロのアナウンサーなどから話し方を学ぶ機会を設ければ、情報発信の成果が出やすいと思います。

テーマ
3

パラリンピック成功への課題と企業支援のあり方

東京大会を満員にするには競技への理解が必要

八田：パラリンピック東京大会の成功に向けて、課題はどこにあるのでしょうか。

山脇：何をもって成功というかについては、いくつかの要素があると思いますが、最も分かりやすいのは、各競技

場が満員の観客で盛り上がり、日本人選手が大活躍し、その模様がテレビなどで中継されることだと思います。しかし、現在の観客は残念ながら、家族や友人、関係者がほとんどで、このままでは心配です。観客を増やすためには、何よりも実際に競技に足を運んで、競技をよく知ってもらうことが重要になります。

企業には、「ウチは射撃を応援する」

「ウチはボッチャだ」「ウチは車椅子バスケットだ」というように、各競技のファンクラブのようなものをつくって、競技を見に来ていただきたいと思います。競技を見れば、必ず面白さが分かります。そうすれば、選手や競技の面白さが口コミで伝わり、新たなファンの開拓につながると思います。

また、特に若い人をファンにするためには教育が重要ですが、現在の学習指導要領にはオリンピックについては書かれているものの、パラリンピック

ぜひ競技を見に来てください
きつと楽しめると思っています

森脇敏夫氏

障がい者射撃・ピストル選手



1968年神奈川県生まれ。アスナビにより2015年からウスイホーム経営企画室に勤務。2013年第26回全日本障害者ライフル射撃競技選手権大会AP60M優勝、IPCワールドカップイギリス大会12位、オーストラリア大会16位、アメリカ大会39位。

については何も触れられていません。そうした中で、パラリンピック選手による出前授業などを通じて、競技や障がいについて理解してもらうことが大変重要になります。

東京都では既に2,200校程度の学校で、こうした試みが行われています。今後はこれを全国に広げていく必要があります。これと同じように企業でも、研修などで、こうした取り組みを導入していただきたいと思います。例えばアイマスクを付けてブラインドサッカーを体験してみるだけでも、障がいへの理解が深まるはずで。

パラリンピックを支援することで感動や共感が生まれ、企業としての一体感も生まれるのではないのでしょうか。今年の4月から障がいを理由とする差別解消の推進のための「障害者差別解消法」がスタートしますが、そうした点でも、パラリンピックを応援して障が

いを理解することが重要だと考えます。

アスナビを活用した企業では
競技ファン獲得にも一役

八田：私もいろいろな形でパラリンピックとの接点を増やすということが大切だと思います。アスナビもそうした取り組みの一つといえますが、森脇さんはどんなきっかけでアスナビに登録したのですか。

森脇：私の前職の職場は従業員の6～7割が障がい者で、とても理解のある会社でした。ただし、そうはいつてもパラリンピック選手のサポートまでする余裕はなく、長期の大会は欠勤扱いとなり、遠征費もすべて自己負担でした。東京オリンピック・パラリンピックが決まったときに、どうしても出場したいと思い、より良い環境を求めてアスナビに登録しました。

八田：実際に現在の会社に入社して、周囲の皆さんの競技に対する理解はどうですか。

森脇：まだ入社して日が浅いので、これからだと思います。まずは私個人が信頼を得られるように、仕事も頑張っていることをアピールしています。会社からは「競技に専念してもいい」と言われたのですが、自分自身のセカンドライフを考えて、仕事と両立することにしました。海外遠征などは特別休暇扱いにしてもらえますし、費用も負担してもらっています。

また、会社が社内ブログを開

設してくれたので、社内のファン獲得に役立っています。今後は地域や社内のイベントで、デジタルピストルやビームライフルといった一般の方も扱える銃を使って、射的を楽しめる機会を設けるなど、競技についての理解を深めていきたいと考えています。

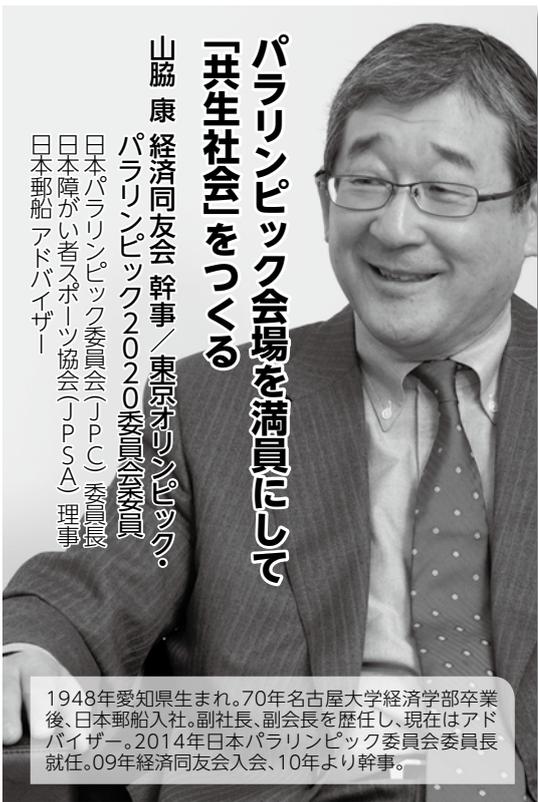
八田：アスナビを通じて選手を採用した企業では、社員が多数応援に訪れています。そうした企業は「こういう運営方法にしたら、もっと観客が増えるのでは？」といった企業目線でのアイデアも持っているのでは、それを競技団体に伝えるようなことも行っています。アスナビは、そういう点でも意義がある取り組みだと思います。

山脇：東京大会を満員にするには、教育現場や企業など総動員で競技への理解を深めなければいけません。アスナビ参加企業がお互いのノウハウを公開して共有するような場も、今後は設ける必要があるのではないのでしょうか。

パラリンピック会場を満員にする
「共生社会」をつくる

山脇康 経済同友会 幹事 / 東京オリンピック・パラリンピック2020委員会 委員

日本パラリンピック委員会(JPC) 委員長
日本障がい者スポーツ協会(JPSA) 理事
日本郵船アドバイザー



1948年愛知県生まれ。70年名古屋大学経済学部卒業後、日本郵船入社。副社長、副会長を歴任し、現在はアドバイザー。2014年日本パラリンピック委員会委員長就任。09年経済同友会入会、10年より幹事。



パラリンピックサポートセンターのホームページ。競技の紹介から注目選手、大会・イベントスケジュールが掲載されている。

■日本財団パラリンピックサポートセンター (通称：パラサポ)

パラサポは、2020年東京パラリンピック大会の成功とパラスポーツの振興を目的に、2015年5月、日本財団の支援により設立された。会長は山脇幹事。主な活動は、パラリンピック競技団体の組織基盤強化にある。また、アスリートの生活基盤や練習環境の向上、パラリンピックの普及・啓発活動が行われている。パラサポでは、競技団体支援のため広報、推進戦略、競技団体支援を担当する各部門の人材を募集している。

■お問い合わせ

日本財団パラリンピックサポートセンター
担当者：金子知史

MAIL：t_kaneko@parasapo.tokyo

☎：03-6229-3721

テーマ 4

企業がパラリンピックにかかわることの意義

障がい者スポーツとかかわり ダイバーシティを実践する

八田：企業がパラリンピックにかかわる意義は、どこにあるとお考えですか。

山脇：パラリンピックのような障がい者スポーツは、純粋に面白い競技なのでぜひ会場に足を運んでいただきたい。会場に来てくれたら選手は大いに喜びます。つまり、観戦に来てくれること自体が最大のボランティアだといえます。最近では企業の合併や再編が多く、一体感が生まれにくい状況ですが、社員みんなが団結して応援したり、観戦したりして、感動や体験が共有できる

というのは、企業にとって大切なことだと思います。企業の一体感の醸成のためにも、ぜひ障がい者アスリートを活用していただきたいと思います。

また、そうした経験を通して、障がい者のみならず高齢者、LGBT(性的少数者)など多様な人々との共生の素地が生まれ、企業が社会とつながる基盤になるはず。グローバル経営においても、ダイバーシティは大きなテーマであるはず。障がい者アスリートを受け入れたり、パラリンピックにかかわることは、ダイバーシティの実践にもなるのです。これは企業のブランド価値の向上をもたらします。

障がい者スポーツとかかわりを持つ

ことは企業にとって一石二鳥どころか、一石何鳥にもなるのです。

八田：パラリンピックの魅力や可能性を多くの人に知ってもらうために、森脇さんは企業に何を期待しますか。

森脇：私の前職は人材紹介業でした。そこで障がい者雇用が思うように進まない現実を目の当たりにしてきました。多くの企業は、障がい者をどう受け入れればよいか分かりません。パラリンピックなどを通じてそれを理解していただくことで、障がい者雇用につながることを期待しています。例えば、射撃では障がいに合わせて車椅子や器具を改造します。「なぜ改造するのか？」と考えることをきっかけに、障がいについての理解を深めることができます。障がい者も、ちょっとした工夫で就業できることを理解していただきたいと思います。それがひいてはハード、ソフト両面で社会のバリアフリー化を促進し、共生社会の実現につながるはず。です。

山脇：さすがに現役のアスリートの言葉は説得力があります。ほかの選手にもどんどん情報発信してもらいたいと思います。

八田：山脇さんや森脇さんが指摘された課題がクリアされれば、競技力の向上につながり、2020年東京大会は大いに盛り上がることでしょう。本日はありがとうございました。



第6回「One Company, One Athlete」

3月3日開催

トップ・アスリートのための 支援・雇用に向けた企業説明会



経済同友会は、2010年より日本オリンピック委員会（JOC）のアスリートの就職支援ナビゲーション「アスナビ」に協力してきた。「アスナビ」を通じて、多くのトップ・アスリートが企業に採用され、充実した環境で練習に取り組んでいる。第6回となる経済同友会での説明会では、7人のアスリートがプレゼンテーションを行った。

アスリートの活躍は 国民に夢と希望と感動を与える

トップ・アスリートの就職支援ナビゲーション「アスナビ」では、2010年10月に第1回説明会を経済同友会で開催して以来、72社100人の採用実績を挙げることができた。現時点では、28人が就職希望者としてエントリーしている。

挨拶に立った横尾敬介副代表幹事・専務理事は、「トップ・アスリートが活躍することは、企業にとって大きな効果



横尾 敬介 副代表幹事・専務理事

が期待できる。今後も多くのアスリートが、生活・練習環境を改善してレベルアップできるように、支援をお願いしたい」と企業に協力を呼びかけた。

程近智東京オリンピック・パラリンピック2020委員会委員長は、「東京オリンピック・パラリンピックを、国民を勇気付ける素晴らしい大会にするには、アスリートが最高のパフォーマンスを発揮することが重要であり、そのための環境整備が企業の役割になる。アスナビが一過性のものでなく、レガシーになるように期待したい」と今後の期待を語った。

平岡英介JOC専務理事は、「アスリートの活躍は、国民に夢と希望と感動を与える。今日は7人のトップ・アスリートがプレゼンテーションを行うが、彼らは今年のリオデジャネイロ大会、2年後の平昌大会、そして4年後の東京大会を目指して鍛錬している。企業の皆さまのサポートをお願いしたい」と



平岡 英介氏 JOC専務理事

支援を呼びかけた。

その後、女子マラソンのオリンピックメダリスト、有森裕子氏が、アスリートに応援メッセージを送るとともに、アスリートが企業で果たす役割について語った。続いて、アスナビを通じてアスリートを採用した市進ホールディングスと乃村工藝社から実例を報告した後、トップ・アスリート7人によるプレゼンテーション、採用を検討する企業とアスリートの懇談会が行われた。

社員一人ひとりの思いが 成果に結び付く アスリートは競技を通して それを具現化する

有森 裕子 氏

バルセロナオリンピック女子マラソン銀メダリスト
アトランタオリンピック女子マラソン銅メダリスト



「あきらめない」という強い思い “心の素質”が重要

アスナビのような形でアスリートを企業がサポートすることは、素晴らしい取り組みだと思います。私が就職したころには、こうしたシステムはありませんでした。

私が陸上競技に進むきっかけは、中学時代に校内運動会の800メートル競走で3年連続で優勝したことでした。それまではバスケットに打ち込んでいましたが陸上に興味を持ち、進学した岡山県の就実高校で陸上部への入部を希望しました。しかし、素質ある選手が多数いる中で、素人同然のランナーなど不要とされ、当初は入部を許されませんでした。それでも必死に訴えて1カ月間の仮入部を認めてもらい練習した結果、正式に入部を認められました。目立った結果を残すことはできませんでしたが、恩師は「あきらめるな」「大切なのは気持ちなんだ」と諭してく

れました。

「あきらめない」という強い思いは、人を引き寄せます。アスリートは、そうした思いを持ちながら競技を続けるべきです。アスリートには体の素質以上に“心の素質”が重要であり、技術や能力以上に「競技を通じて人間として何をどう伝えるか」を追求することが大切です。それは、引退後に一般社会で生きるための素養を身に付けることにもつながります。本日のプレゼンテーションでも、アスリートの皆さんには、そうした思いをアピールしていただきたいと思っています。

社員に勇気を与え、会社の危機を 救ったアスリートの走り

私は大学卒業後、1989年にリクルートに入社しました。それまでの実績はほぼゼロでしたが、小出義雄監督に、「どうしても走りたい」という強い思いを伝えました。小出監督は、私の思いを受け止めてくれ、リクルートへの入社の手はずを整えてくれました。会社からは「会社も社員一人ひとりの思いから成り立っている。あなたの思いは必要だと判断した」と言われました。入社式で、私は「絶対に会社に恩返しをする！」と心に誓い、社章を実家の神棚に供えました。当時のリクルートは、一大スキャンダルとなったリクルート

事件の余波で、大変な状況にありました。営業は訪問相手に名刺を受け取ってもらうことさえできなかったそうです。

陸上部も世間の冷たい目にさらされ、会社からは「ユニフォームから社名とマークを取り除いてもよい」と言われましたが、当時のキャプテンが「正々堂々と走りたい」とそれを拒否して駅伝に出場しました。その結果、見事に3位入賞を果たし、応援していた社員は涙を流して喜んでくれました。こうして社員一丸となって危機を乗り越えることができました。

アスリートたちの思いを 形にするサポートを

その後、私の実力も向上し、マラソンで良い成績を残すようになりました。すると営業の方たちは、私のマラソンの話題をきっかけに、訪問先の方と話が弾むようになったそうです。このような経験を通して、私はスポーツの持つ力を実感するようになりました。

私が熱い思いを大切に競技を続けたように、企業においても社員一人ひとりの思いが成果に結び付くのだと考えます。アスリートは、それを競技によって示してくれるはずであり、企業にとって大きな役割を果たすはずですが、皆さんの力で、アスリートたちの思いを形にするためのサポートをお願いしたいと思います。



多くの企業でWin-Winの関係が生まれている

冒頭で八田茂JOCキャリアアカデミー事業ディレクターが「アスナビの支援で、既に100人のアスリートの就職が決まった。最近では新卒採用や非上場企業による採用が増えている。各社とも競技優先のスケジュールや活動費負担などさまざまな支援を行っている」と現状を報告するとともに、「今後もアスリートと企業とのWin-Winの仕組みとして発展させたい」と抱負を述べた。

採用企業のメリット

- ・日本国内のみならず、グローバル拠点を含めた社員の一体感を醸成する。
- ・競技を通じた諦めない心、世界へ挑戦し続ける姿勢が社風づくりに影響する。
- ・メディアへの露出により高い宣伝効果を生む。

■採用実績事例紹介

アスリートのアピール力を活かし 学童保育の講師を務める

市進ホールディングス

1965年に創業し、現在は塾や予備校を中心に、幼児教育、学童保育、日本語学校、さらにはシルバーサポートなど多彩な事業を展開する市進ホールディングスでは、2015年6月、ア



七戸仁人事部部长と藤井桜子選手

イスホッケーの岩原知美選手と、ビーチバレーの藤井桜子選手を採用した。その出会いはアスナビだった。

「二人の力強いプレゼンに感銘を受け、ぜひ採用したいと思った」と人事部の七戸仁部長は語る。

現在、二人は競技生活と並行して、週2回程度出社している。特徴的な業務として、アスリートのアピール力を活かして学童保育『ナナカラ』の講師を務め、小学生に、競技体験などを含む指導を行っている。企画、スタッフとの連携、運営などについても、二人が担当する。これは、アスリートの将来にとって大きな財産になる。

また、二人はブログを通じた情報発信も行っており、社内外から多数のアクセスがある。

藤井選手は「児童への指導は、やりがいのある仕事。社内外の人とコミュニケーションを交わすことで、競技に向かうエネルギーが生まれる。今は私にとって会社全体がチームのような存在」と現在の活動について語る。

会社として、今後はグループ内でのPRをさらに推進するほか、競技団体との連携や、アスリートを採用した企業間の連携も強化したいと考えている。

■採用実績事例紹介

アスリートと企業が本気で向き合うことで ポジティブな効果が生まれる

乃村工藝社

「集客空間創造企業」をうたう乃村工藝社では、2014年にパラ・パワーリフティングの西崎哲男選手を採用した。

採用の目的について、スポーツぶんか事業開発室の原山麻子室長は、「障がい者雇用を促進し、社員の連帯感の醸成と士気の高揚、自社の社会的認知度の向上を目指したもの」と語る。

西崎選手は競技を優先しながら、週二日程度大阪事業所で一般事務や広報などの業務に当たる。しかし、当初、社内での関心は低く、2015年の西日本選手権には、わずか9人しか応援に参加しなかった。どうすれば社員が競技を理解し、西崎選手が好成績を取られるのか。西崎選手と本気でミーティングを行い、現状を分析し、支援施策を会社に上申した。

こうしてさまざまな施策がスタートした。大阪事業所へのトレーニングルーム設置、東京での強化トレーニングなどと

並んで、社内セミナーを開催したところ120人の社員が参加。競技の魅力や西崎選手の可能性をアピールした。その結果、2016年の全日本選手権会場には社員60人、その家族14人の74人が応援に駆け付け、場内は大歓声に包まれた。そして、西崎選手は自己の日本記録を更新した。「アスリートと企業が本気で向き合うことで、お互いにとってポジティブな効果が生まれることを実感した」と原山室長は語る。

現在では、採用時の目的だけでなく、市場開発や社員の健康増進、共生社会に向けた設計意識の向上などの新たな効果も生まれている。



原山麻子スポーツぶんか事業開発室室長

トップ・アスリートによる プレゼンテーション

企業説明会では7人のアスリートがプレゼンテーションを行った。それぞれの競技に対する思い、就職後の企業に対する貢献のあり方について語った。

※経歴は3月3日現在

トップ・アスリート支援について
お問い合わせ先

JOC キャリアアカデミー

■ e-mail : career@joc.or.jp

■ TEL : 03-5963-0354

※電話受付時間は平日の午前10時から午後6時まで

心を燃やせ！ 逆境はチャンス！



森本 麻里子
(もりもと まりこ)

陸上競技／走幅跳、三段跳

1995年生まれ(20歳)。大阪府大阪市出身。日本女子体育大学体育学部卒業見込み(2017年3月)。三段跳びは大学入学後から始め、急成長している。大学陸上部では主将を務める。2014年、日本ジュニア陸上競技選手権大会／三段跳優勝、2015年日本陸上選手権大会／三段跳6位、日本学生陸上競技対校選手権大会／三段跳2位。

私は、逆境こそ自分を成長させるチャンスだと前向きにとらえています。昨年の日本選手権では2回連続ファールと窮地に追い込まれましたが、恩師の「心を燃やし、冷静かつ積極的思考で」という言葉を思い出し、三本目ではしっかりと記録も残せるジャンプができました。今、私は部員90人の陸上部の主将を務めています。部員がいかにより良い環境で練習できるかをテーマにチームをまとめています。東京大会までには、ホップ、ステップ、ジャンプと毎年30センチずつ記録を伸ばすことを目標にしています。

社員を活気づけられる アスリートに



岸 大貴
(きし だいき)

体操／トランポリン

1994年生まれ(21歳)。石川県小松市出身。金沢学院大学卒業見込み(2017年3月)。ジュニア時代から日本代表として活躍。姉の岸彩乃選手はトランポリンでロンドンオリンピック出場。3年前から強化指定選手としてワールドカップ等海外の試合でも活躍。2015年全日本選手権／団体1位・シンクロナイズド2位。

私は3歳からトランポリン競技を始めました。高校では、スポーツコースではなく、あえて進学コースを選択するなど、文武両道を目指し、大学では保健体育の教員免許の取得に励んでいます。リオデジャネイロ大会の選考には漏れましたが、それをバネに全日本学生選手権大会では全部門制覇することができました。さらに上のレベルにステップアップするため、練習拠点を東京に移し、新たな環境・刺激の中で東京大会を目指したいと思います。就職後は、社員の皆さんを活気づけられるよう、会社に貢献したいと思います。

どんなときも 笑顔を忘れない



床 亜矢可
(とこ あやか)

アイスホッケー／
ソチオリンピック日本代表

1994年生まれ(21歳)。東京都東村山市出身。法政大学スポーツ健康学部卒業見込み(2017年3月)。父はアイスホッケー元日本代表選手、妹も日本代表。2010年に女子U18日本代表として世界選手権に出場。2014年大学1年生のとき、スマイルジャパンの一員としてソチオリンピック出場。2013年の世界選手権では大会のベストディフェンスに選出される。

日本代表チーム「スマイル・ジャパン」の愛称は、コーチの「世界と闘う力はある“Every time Smile!!”で前に進め」というアドバイスに由来があります。どんなときも笑顔を忘れないという姿勢は、競技以外でも大切にしたいと思います。今、何人かの選手は海外でプレーしていますが、私は日本の企業に勤めることで、コミュニケーション力などを磨き、人としての土台をつくりたいと考えています。私のプレーを見て、会社全体が一つのチームのように力を合わせて働けるような、一体感の醸成に貢献したいと思います。

BMX講習会を開き 一体感の醸成を



吉井 康平
(よし こうへい)

自転車競技/BMX

1995年生まれ(20歳)。東京都国立市出身。日出高等学校卒業。ジュニア時代より頭角を現し、国内最上位クラスのエリートクラスとして世界選手権などのトップレベルで活躍する。2013年アジア選手権/ジュニア優勝、2014年アジア選手権/エリート2位、2015年世界選選手権出場。

私は10歳から世界選手権に出場し、今はワールドカップを転戦しています。これまでの道のりには、多くの困難がありましたが、大きな目標に向かって、小さな目標を一つひとつクリアしていくことで、今に至っています。この姿勢は、仕事でも十分に活かせると思っています。現在は、アルバイトをしながら競技生活を送り、BMX初心者向け教室の講師も務め、子どもから大人まで指導しています。就職後は、会社内でBMXの講習会を開き、社員の皆さんに体験してもらい魅力を伝えていきたいと思っています。

人生を懸けて 精進していく覚悟



宮山 亮
(みややま りょう)

フェンシング/サーブル

1988年生まれ(27歳)。千葉県八千代市出身。中央大学文学部卒業。NEXUS(2016年3月31日退職予定)中央大学時代は主将で、エースとして活躍。全日本学生選手権では優勝に貢献。2011年以降はナショナルA代表として活躍。2014年フェンシングアジア選手権/サーブル個人21位、団体2位、2015年アジア競技大会/サーブル団体7位。

日本代表として世界で戦ってきた経験から、広い視野と国際感覚、また固定観念にとらわれない柔軟な発想力を身に付けていると自負しています。高校、大学と主将を務め、チームをまとめる力や忍耐力を養ってきました。採用後は、その力を活かし、企業の理念にふさわしい社員として行動し、選手として企業のイメージアップに貢献できると確信しています。今後は国内外の大会で結果を残しながら、2020年の東京大会でメダルを獲得するため、人生を懸けて精進していく覚悟です。

「やる気」「勇気」「感動」を 共有したい



鈴木 沙織
(すずき さおり)

フリースタイルスキー/ハーフパイプ

1990年生まれ(26歳)。山形県長井市出身。資生堂美容技術専門学校卒業。2010年TAYA退職。小学校五年生から高校三年生まではアルペンスキーの選手。21歳のときからフリースタイルに挑戦。2015年レボリューションツアー-FISレース(アメリカ)/優勝、ニュージーランド・ワールドカップ/4位、2016年マンモスマウンテン・ワールドカップ/4位。

私のハーフパイプへの取り組みは、21歳という遅いスタートです。だからこそ時間が大切で、何が必要で何が不要でないかを効率的に考えるようになりました。目標達成のためにビジョンを描き、やるべきことに優先順位を付けて時間を管理し、練習に励み、この5年で世界大会4位になるまで駆け上がってきました。この間、大けがによる手術も経験しましたが、どんなときも前向きな気持ちで取り組んできました。私の競技で培った精神力で、多くの人と「やる気」「勇気」「感動」を共有できると信じています。

人の心の輪を広げる 「心」となる



伊藤 心
(いとう いのち)

フェンシング/エペ

1990年生まれ(26歳)。秋田県能代市出身。中央大学法学部法律学科卒業。NEXUS(2016年3月31日退職予定)大学時代は全日本レベルではなかったものの、社会人チームに所属してから頭角を現し、2014年ワールドカップグランプリ・スイス大会では日本男子エペ史上初の銅メダルを獲得した。2015年ワールドカップグランプリ・カタール大会/8位。

昨年、地元の秋田県能代市に私の後援会をつくっていただき、550人もの方が会員になってくれました。これは、大きな励みとなっています。私はこれまで企業に所属し、接客業に従事する中で、人とのコミュニケーション力を培ってきました。これからもこの経験を活かし、人の心の輪を広げる「心」となって、企業活動に貢献していきたいと思っています。2020年東京大会では、フェンシング選手にとってのピーク年齢といわれる30歳に到達します。メダル獲得と、その先にある競技の普及に向けて、全力を尽くします。